

日米 TR 発展過程の比較から考察するレクリエーションにおける楽しさの位置づけ

マーレー寛子(京都府立大学大学院)

1. はじめに:セラピューティックレクリエーション(以下 TR)がアメリカで発展し始めて半世紀以上経つ。TR が専門職としてアメリカで確立していく過程の中で、この分野が直面してきた TR が TR であるという固有性との葛藤が見られる。治療の一環であるセラピーとしての TR なのか。あくまでもレクリエーション(以下レク)としての「楽しさ」の提供なのかをアメリカの多くの TR 関係者は議論してきている。また、日本における TR の発展は、アメリカにおける TR の発展とは別の背景や課題を持って展開されてきた。アメリカや西欧諸国での人々の余暇の価値観や考え方と、日本文化の中で培われた余暇文化や福祉に対する考え方や歴史の違いからも福祉分野で発展してきた TR への考え方の違いが大きく出てくる。本研究は、高齢者のための TR サービスの研究を進めていく上で重要になってくる TR サービスにとっての「楽しさ」の位置づけを、アメリカにおける TR の発展の歴史を振り返ることによって人々が TR に何を求めているのかを見出し、TR がユニークなサービスであり続けるための TR の定義を検証する。そして日本のレクリエーションの近代史を見直しどのような背景で余暇やレクが日本人の生活や福祉分野の中に位置づけられているかを振り返る。その上で今後の福祉現場のレクにおける「楽しさ」の役割について考察する。

2. アメリカにおける TR の発展:アメリカの TR は、約半世紀をかけて医療、福祉、教育の中で専門職としての位置づけを確立してきた。TR がレクというユニークな特徴をどのように生かし、理学療法や作業療法などの隣接職種との差別化を計るのが専門職としてのアイデンティティの確立の中で重要になってくる。TR の発展の中で見られる大きな動きとしては、医療機関におけるレクの発展と地域における社会的弱者のためのレクの発展が見られる。アメリカにおける TR の組織的な取り組みの始まりは、第一次世界大戦にアメリカが突入後、米国赤十字は、軍人のための病院や回復期のセンターなどにレクサービスの提供を始めた。1920 年代、赤十字が軍事基地の病院や退役軍人のための病院に最初の TR としての職を確立した (Carter & Van Andel, 1985)。その後、社会改良運動の一つとしてのレク運動を通して社会的弱者へのレクの必要性が注目され、また、1950 年代から 1960 年代にかけて、地域の在宅障害者のためのレクサービスも活発になってきた。

3. TR の定義の変遷:このように TR 実践現場の特徴が大きく異なるところから成長してきた専門職たちが、その理念や目的に対して異なった意見を持つのは自然なことといえる。TR の定義の変遷を見ていると彼らの葛藤が見えてくる。「Recreation Therapy」の用語は、1950 年代から 60 年代初頭の間、広く使われていた。「セラピー」が持つ意味として、総合的な治療過程の中で最大限の効果と一貫性を持った医学的な処方が必要となってくる。Meyer(1980)は、セラピストとして働いているレクスタッフの役割は、治療の範囲と深さそして、医者との個人的なかわり方によって大きく左右されると述べている。「Therapeutic Recreation」という言葉は、Avedon(1974)の報告によると 1950 年代に初めて文献に使われ始め、特殊な施設に入所していて地域の中で提供されているレクプログラムに参加することが出来ない人々へ提供するレクサービスを指していたとしている。1961 年に開催された TR Curriculum Development Conference に於いて用語について議論され、問題や傾向を明確にし、障害者や病人に対してのレクサービスの役割や機能について検討された。この会議後、2年にわたって議論され、その結果、Hospital Recreation, Recreation for the Ill and Handicapped, Recreation Therapy, Medical Recreation 等の用語に代わって Therapeutic Recreation が使われるようになってきた (Reynolds & O'Morrow, 1985)。MacLean(1963)は TR という用語が使われる理由として、①治療を強調するのではなく、レクのその意義を見出している。②他の用語よりも包括的であり、幅広い対象者に用いることが

出来ると述べている。最も初期に TR のテキストを書いた Frye と Peters(1972)は、TR を「レクの経験と共にセラピューティックな効果に到達又は最大限にするための意図的な取り組みのプロセスである」(p.44)と述べている。O'Morrow(1976)は、TR を「プロセス」と「サービス」として定義づけている。Iso-Ahola(1980)は、「TR は、レクとレジャーを通してクライアントの生活の質を高めるために計画された目的を持った介入である」としている。また、Kraus(1984,pp.270-271)は、レクの役割は、「広義においてのリハビリテーションに貢献し、生活をより楽しいものにするものである。よってその目的は、社会交流を活発にし、効果的な機能向上を目指し、生活をよりよいものとし、廃用性による障害の予防、そして社会資源の最大限の活用を助けるためのものである」と述べている。

4. TR 組織の確立:アメリカでの2つの大きな TR の専門組織である National Therapeutic Recreation Society(NTRS) と American Therapeutic Recreation Association(ATRA)においてもそれぞれの立場で TR を定義している。アメリカでのこのレクに関連する専門職の組織化は、複雑な背景を持っている。TR 分野において様々な組織が誕生していった。病院を中心とする組織や養護学校などにおける障害者のための体育やレクに焦点を置いた組織などが出てきた。1960 年代になるとそれらの組織の統合が必要であるかが議論されていった。1966 年に National Recreation and Park Association(NRPA)が設立されその部門の一つとして NTRS が設立された。NTRS が設立された当初、全ての人々にレクの機会を提供するためという大きな理念の下始まった。しかし徐々に NTRS に対する不満が出てくる。これらの不満の中で、理念が漠然としすぎ TR が「手段」か「目的」であるかという議論が絶えず繰り広げられた。医療従事者は、レクが医療としての「健康」を目指すものであるという意義を強調できていないと感じていた。Meyer(1980)は、レクセラピストと障害者のためのレク指導者は、目的、環境、手法に違いがありすぎ、一つの組織の中で共存することの難しさを述べている。1984 年、医療・保健におけるサービスを中心とした ATRA が立ち上がった。しかしこの組織においても TR の目的は自立機能を必須とする適切な余暇生活スタイルの向上に重点を置くとして中立の考えを示すに留まっている。

アメリカでの TR の発展は、大きく2分されてきた。医療的なセラピーとしてのレクと社会的弱者に対する適切なレク機会の提供という視点の TR である。1984 年に発表された Leisure Ability Model (Peterson & Gunn,1984)は TR 分野では、最も広く活用され、議論されてきたサービスモデルである。Sylvester(1989)は、TR の分野の中で、組織的にも分裂し、不安定な状況にあった時、このモデルによって TR サービスに一つのガイダンスが示されたと述べている。1998 年に Stumbo & Peterson が出した Leisure ability Model の論文の中で彼らは、TR の最終的な目的は、自立と余暇機能そしてレジャーライフスタイルを向上させるためにあるとしている。彼らは TR の目的は単にセラピーではなく、単なるレク参加でもなく、その果てには、生活の質、幸せ、楽しさにつながるものでなければならないと考えたのである。

アメリカでの TR の取り組みは、まず、レジャーありきであり、そのレクやレジャーを支援する延長上に介護がある。アメリカの文化として彼らにとって充実した余暇生活を持つことは重要であり、その為の治療であり、余暇教育であり、参加への支援と考えている。しかし、治療が優先されるのかレク機会の提供が優先されるのかの議論は未だ解決されていない。レク機会の提供が目的とする場合、機会を提供すればいいだけのことではない。「therapeutic」であるためには、そのレク経験を通して人がどのように成長し変化するかということに着目し、その人が楽しみや達成感、自己実現又は、幸福感を達成するための援助出なければならない。また、TR が医学的又は、理学療法的な治療であるとする、たとえその人が不本意であれ、その治療目的が達成することが目標となる。そうするとそのような活動を本来のレクリエーションと呼ぶ必要がなくなってしまう。

5. 日本における高齢者のためのレクリエーションの発展:日本の福祉現場でのレク援助は、反対に「生

活援助の意味合いが濃くなっている。日本の福祉分野でのレクリエーションは、アメリカでの余暇やレクの発展とは異なり、また、福祉の歴史においても価値観や文化の違いから人々は余暇生活をどのように楽しむかという視点よりも日々の生活をどのように豊かにするかという視点で余暇やレクを考えている。高齢者の福祉は、明治時代では、特に法律で位置づけられることは無く、養老院が高齢者を対象とした施設として創設された頃であり、生活困窮者の保護救済を目的とされていた。「日本老人福祉史」(1997)によると1903年に設立された東京養老院入所者の日課の中に娯楽として御詠歌、ラジオ、囲碁将棋、園芸、養鶏などが載せられている。昭和初期の高齢者福祉を見ると、福祉サービスを受けている人々は、受けていない人々の最低生活基準よりも「安楽、満足」過ぎてはいけないという劣等処遇の原則が強く打ち出されており、彼らのレクに値する娯楽は、碁、将棋蓄音機、雑誌、講談本や行事など最小限のものであった(倉田,2001)。

戦後においての高齢者福祉とは、扶養者のいない在宅における生活困窮者への生活保護法としての対策から、レクの位置づけとしては、1955年に制定された厚生省令に基づき示された「保護施設の取扱指針」において「処遇の種類」の中で、生活指導、給食、保健衛生、医療と並んで教養娯楽、作業などと分類されていた。この頃から少しずつ高齢者の人としての個別ニーズを配慮しようとする流れが出来る(倉田,2001)1963年に老人福祉法が制定されここで初めて高齢者のための法律として、老人が心身の健康の保持に努め、豊富な知識と経験を有するものとして敬愛され、生きがいを持てる健全で安らかな生活が保障されることという理念を明確に示された。そのためのレク参加の機会を提供していくことや教養娯楽設備を整えること、レク行事を行っていくことなども法律として示された。さらに1982年に制定された老人保健法の目的として第1条に「国民の老後における健康の保持と適切な医療の確保を図るため、疾病の予防、治療、機能訓練等の保健事業を総合的に実施し、もって国民保健の向上及び老人福祉の増進を図る」とあり、その具体策としての保健事業の中にある機能訓練では、「習字、絵画、陶芸、皮細工等の手工芸、レク及びスポーツ、交流会」などが挙げられている。1995年には、高齢社会対策基本法が施行され、その中で高齢者の生きがい、社会参加、生涯学習が示されている。高齢者の社会参加の促進施策として老人クラブ活動事業、高齢者の生きがいと健康づくり推進事業、そして高齢者社会参加促進事業があり積極的な活動が展開されてきている。このように高齢者のレク関係の法整備、施策が進められては来たが、これらの施策は、ある程度自立して元気な高齢者に対するものであってこの人々が福祉サービスを受けるようになった時にその余暇生活スタイルが継続されるかといえばそうではない。本来であれば、老人クラブや公民館活動などを通して培ってきた余暇生活スタイルが病気や障害をとまなうことによって利用し始めた福祉サービスの中で継続できるべきである。しかし現実には老人施設の中で行われているレクの実態は、日本における「レクリエーション」という言葉のイメージから多くの施設では歌、ゲーム、体操、いわゆるお遊戯的な活動が多い。また、集団処遇で画一的なサービスが提供されている現状に対して批判もされてきた(船越,2009)。介護保険法が2000年から開始され、利用者の権利意識が高まり、利用者がサービスを選べるようになった。レクにおいてもそれまでの単なる暇つぶしのような内容ではなく個別の援助計画が求められ始めた。その中で、レクが果たしてきた役割として、生活を心地良くするための一つの手段としても考えられた。「レクリエーションは生活の快」と唱えた垣内の考え方は、福祉現場で広く受け入れられ福祉における介護の質を高める上で大きく影響したのではないかと考える。

6. 考察：日本の福祉分野におけるレクリエーションの発展は、米国の医療的・リハビリテーション的な発展とは異なり、特に高齢者福祉分野における施設での「生活」を中心とした「娯楽」としての生活援助の一つとして発展してきたと考えられる。生活援助の一つとして発展してきた福祉分野でのレクは、「生活」の質を高めることが福祉分野の第一の目的であるが、その生活の質を高めるためのものとして

尽きるとすれば、極端に言えばレクリエーションという呼称でなくてもいいはずである。先に述べたレクとは生活の快であるという考えだけで止まってしまう、その先にある本来の余暇生活の充実から得られる満足感、達成感、自己実現そして幸福感への取り組みのための援助という視点を強調できていないのではないだろうか。レクの目的の一つである「楽しさ」がこの日本におけるレクの発展を振り返って、あまり強調されていないように感じる。人間は、「楽しさ」を感じるから生きがいを感じ、自己実現をはたし、生活の質が高まっていくのではないだろうか。日本の福祉分野におけるレクの今後の方向性として、Kraus (1984) が提唱しているように、生活援助を中心にすえ、レクの役割をまず「広義においてのリハビリテーションに貢献し、生活をより楽しいものにするものである。よってその目的は、社会交流を活発にし、効果的な機能向上を目指し、生活をよりよいものとし、廃用性による障害の予防、そして社会資源の最大限の活用を助けるためのものである」とし、ATRA が主張する健康やウェルビーイングを向上させ、その結果 NTRS が強調する、健康や身体機能、自立そして生活の質を高める方法としてのレクサービスとなっていくのではないだろうか。即ちこれは、ICF (国際生活機能分類) が示す心身機能・構造、活動、参加のモデルに適切に合致するものであり、WHO (世界保健機構) が採択した新しい健康観に沿うものとして考えることができる。日米の歴史的、文化的、制度的違いは、簡単には縮めることは、困難ではあるが、今後の課題として、国際的な共通言語である、ICF のような枠組みに沿った考え方を元に、さらにレクの意味や意義を精査し構築していく必要がある。

参考・引用文献

- Avedon, E.M. 1974. Therapeutic Recreation Service: An Applied Behavioral Science Approach, Englewood Cliffs, N.J., Prentice-Hall, Inc.
- Carter, M.J., Van Andel, G.E., & Robb, G.M. 1985. Therapeutic Recreation: A Practical Approach. Times Mirror/ Mosby College Publishing, St. Louis, MS.
- Frye, V. & Peters, M. 1972. Therapeutic Recreation: Its Theory, Philosophy and Practice. Harrisburg, Pa.: Stackpole Books.
- Iso-Ahola, S.E. 1980. Perceived control and responsibility as mediators of the effects of therapeutic recreation on the institutionalized aged. Therapeutic Recreation Journal, 14:1, 36-43.
- Kraus, R. 1984, Recreation and Leisure in Modern Society 3rd. Ed. Scott, Foresman & Co.
- MacLean, J.R., Therapeutic Recreation Curriculums, Recreation in Treatment Centers, 2, pp.23-24
- Meyer, L.E. 1980. Philosophical Alternatives and the Professionalization of Therapeutic Recreation. Arlington, VA: National Recreation and Park Association
- Peterson, C.A. & Gunn, S.L. (1984). Therapeutic Recreation Program Design: Principles and Practices. (2nd ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, Inc.
- Reynolds, R.P. & O'Morrow, G.S. 1985, Problems, Issues & Concepts in Therapeutic Recreation. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, NJ
- Sylvester, C.D. (1989). Impressions of the Intellectual Past and Future of Therapeutic Recreation: Implications for Professionalization. In D. Compton (Ed.), Issues in Therapeutic Recreation: A Profession in Transition (pp. 1-20) Champaign, IL: Sagamore Publishing Company.
- Sumbo, N.J. & Peterson, C.A. (1998). The Leisure Ability Model. Therapeutic Recreation Journal, 17:1, 82-96.
- 百瀬孝, 1997, 日本老人福祉史, 中央法規, p. 28.
- 船越理志, 井尻訓生, 衣笠秀一, マーレー寛子, 横見靖子, 2006, 介護予防サービスにかかる参加・継続推進事業に関する調査研究報告書—新たなデイサービスのあり方を求めて—, 京都府保健福祉部高齢・保健総括室介護保険推進室
- 倉田康路, 2001, 高齢者福祉施設におけるサービスの質の変遷, 関西学院大学社会学部紀要 89, pp. 171-183.